

特に印象に残ったのは、

「言葉をつくる」「言葉を退治する」という考え方でした。

修士1年 王世祺（オウセキ）

ゆき先生

講義内容を振り返る中で、ジャーナリズムとアカデミズムは、対立するものではなく、どちらも社会の現実に向き合い、人と社会をつなぐ力を持っているのだと感じました。

私はもともと、あまりに学術的で難しい表現には少し距離を感じることはありません。物事を複雑に語ることよりも、大切な問題を多くの人に伝わる形で表現することのほうが、本当に大事ではないかと思っています。

特に印象に残ったのは、「言葉をつくる」「言葉を退治する」という考え方でした。

言葉はただ説明のためにあるのではなく、人の見方や感じ方を変える力を持っているのだと思いました。どのような言葉で伝えるかによって、問題の見え方も、人の受け止め方も、変わるのだと感じました。

日本で生活していると、駅や広告の中で、短い言葉なのに強く心に残る表現に出会うことがあります。

たとえば、新聞広告で見た「空気は、読まない。」という言葉は、とても短い表現ですが、周囲の空気に流されず、自分の目で見て、自分の頭で考えることの大切さを感じさせる力がありました。



そうした経験から、私は、言葉には人の気持ちや考え方に働きかける力があると感じています。講義を通して、そのことをあらためて考えました。

今回の講義を通して、ジャーナリズムもアカデミズムも、ただ知識を増やすためのもの

ではなく、人と社会をつなぎ、現実を考え直すためのものだと感じました。

これから私も、難しく語ることより、相手に届く言葉で考え、伝えることを大切にしていきたいと思います。